

2. 併設型中高一貫校教育とカリキュラムについて

丸 山 豊

(1) 併設型中高一貫校の在り方

既設の公立の併設型中高一貫校の場合、併設高校の多くが定時制・単位制高校または専門高校・総合学科であり、普通科の併設高校はまだ少数である。今後都市部に多く設置が予想される「普通科併設型一貫校」の在り方が大きな課題となっている。

国立附属としての本校は、このような社会要請に応えるべく併設型中高一貫校のモデルスクールの役割を求められている。そのための計画的継続的な研究課題を次のように考えている。

- 中高一貫の新しい理念「青年期のキャリア形成」をカリキュラムの中でいかに実現するかという教育課題の継続的研究。
- 中高における人間関係の連続性と流動性を活性化に結びつける教育課程の開発。
 - ・「総合学習」と「心と身体の教育」を柱とした中高一貫教育課程の展開。
 - ・「融合カリキュラム」「中高交流学習」の展開による中だるみ対策としての活性化の在り方研究。

(2) 具体的な課題の推進

①併設型中高一貫校の全体構成区分モデルとしての教育研究の推進

- 併設型では中学部分と高校部分が必ずしも全てにわたって接続できないという特徴がある（複数中学校と高校との接続、または併設中学と高校の学級編成の相違）。また寸胴型にみられる6年間で2年毎に区切る2-2-2製の全体構成区分は併設型では適用できない。したがって教育的にも中高一貫教育の発達段階を考慮した新しい全体構成区分が求められている。

②併設型におけるカリキュラム開発モデルとしての教育研究の推進

- 中学は、ゆとりを活かした「個性を探る」教育課程とし、高校部分では寸胴型のデメリットとされる「中だるみ」対策として、高校入学者（複数中学校出身）の「活性化を図る」普通科カリキュラム

を編成し、個性を伸ばし自立を支援する教育研究の推進をおこなう。

③ストレスを抱える中高生の対社会・対人関係のカリキュラムとしてのソーシャルスキルプログラム（ソーシャルライフ）の開発実践

- 心の教育の一環として中高6カ年にわたる新領域として設置する。
- 中高6カ年で生きる力を育て、同時に社会的自立を支援するカリキュラムとする。
- 異質の他者、様々な個性を認め合い高め合うことをねらいとするプログラムでもある。

④総合的学習の発展的展開として「青年期のキャリア形成」の推進

- 総合的学習のカリキュラム開発の継続をおこなう。
- 総合的学習を通して中・高・大の連携を進め、学校間連携の実践的研究をおこなう。
- 地域のネットワーク化を進め生涯教育等の文化施設、社会教育利用の地域のカリキュラム化をおこなう。

⑤大学との同一キャンパスの立地を生かした高大の連携

以上の教育研究推進は、いずれも中等教育の課題であり、特に今後設置が予想される併設型中高一貫校のモデルスクールとしての役割が重視されてくる。

(3) 本校の目指す新しい中高一貫教育課程

本校は、「併設型の特徴を活かした中高一貫カリキュラム」を基軸とし、寸胴型中高一貫と異なる特色を打ち出すことで新しい中等教育の創造に向けた学校像を構想している。本校が目指す新しい学校像の特色は次の2つにある。

その一つは「個性的自立」を教育目標とした「中高6カ年の新しい発達段階区分」である。これは、前期青年期教育を入門基礎期—個性探求期—専門基礎期—個性伸張期とし、前期課程3年を1-2、後期課程3年を2-1に区分し個性の面から中高一貫を試みるも

2. 併設型中高一貫校教育とカリキュラムについて

のである。(以下1-2-2-1制という)この構造図を基に教科、学習方法、自治能力、対集団、対社会と人間の在り方について6カ年一貫の構築が可能となった。

2つめは併設型の特徴である高校からの外部入学生徒の中高一貫カリキュラムにおける積極的位置づけである。これは、外部入学生徒を「個性導入」のチャンスととらえ「個性を磨き合う」融合カリキュラム展開を構造化したものである。このカリキュラム展開で寸胴型中高一貫の悩みのひとつ「中だるみ現象」を克服し、特色ある併設型中高一貫教育の中身が具体化されることになった。このカリキュラム構造は「総合学習＝総合人間科」、「心と身体」のソーシャルスキルカリキュラム」を2つの幹として中高を貫き、枝にあたる部分として4つの新教科群からなる「融合カリキュラム」をもつ内容となっている。

以上が本校の目指す「併設型中高一貫」の新しい教育課程・カリキュラム像である。

このような教育活動は、名古屋大学の同一キャンパス内に立地する本校にとって、有利な環境を最大限に活かした内容で展開できる。学部附属から大学全体の附属中・高等学校としてゆとりある豊かな環境の中で、21世紀に向けての新しい中高一貫教育を目指したいと考えている。

(4) 併設型一貫教育の特色としての新しい6カ年発達区分

① 中高6か年の区分論について

中高6カ年を一貫して教育する場合の区分は、基礎-充実-発展の3区分とし、それぞれ2年区切りとしてきた(以下この類型を2-2-2制とする)。これに対し安彦元本校校長は(本校紀要第42集1997で)中高一貫校であっても中学教育と高校教育に線を引くべきと提唱している。本校が中2クラス高3クラスの不完全一体型を意識しての分析である。義務教育と非義務教育といった本来の学校意義、個性と自立という生徒の成長過程の両面からの捉え直しである。入り口としての中1と出口としての高3を切り離し、中高に線を引くと1-2-2-1となる(以下この類型を1-2-2-1制とする)。本校の中高一貫カリキュラムは、安彦前校長の提唱した1-2-2-1制を基本としている。

② 1-2-2-1制中高一貫カリキュラム構造

2-2-2制のメリットは中3と高1の連続性から教科内容での一貫制が可能になることである。しかし、多くの私立中高一貫進学校では、高校の教科内容を中学に下ろした2-3-1制(中学内容を中1~2で、高校の内容を中3~高2、残りの一年を

受験シフト)になっている現実からも2-2-2制は受験エリート校カリキュラムに流れる危険が指摘される。デメリットは中学が高校の付属物に成り下がることである。また高校も中学に引っ張られる。いわゆる「中だるみ」とは自立におけるこれらの問題も含んだ上で用いたい。

次に個性と自立の両面を基本理念とした1-2-2-1制中高一貫カリキュラム構造を安彦論文にしたがって考えていく。1-2-2-1をそれぞれ入門基礎期-個性探求期-専門基礎期-個性伸長期とし横軸に置き、縦軸には2つの要素(柱)を置いた。1つは「個、学び、生活」の面から学び方、自治能力、自立の一貫制である。2つ目に「心と身体」の面、すなわち人間関係の構築、コミュニケーション、生き方の一貫制である。

この構造化は次に示す「総合学習＝総合人間科カリキュラム」と青年期に欠かすことができない心の問題、身体の問題を体系化した「ソーシャルスキルカリキュラム」(ソーシャルライフ)の展開の基盤となる。

③併設型中高一貫6カ年発達区分とその構造

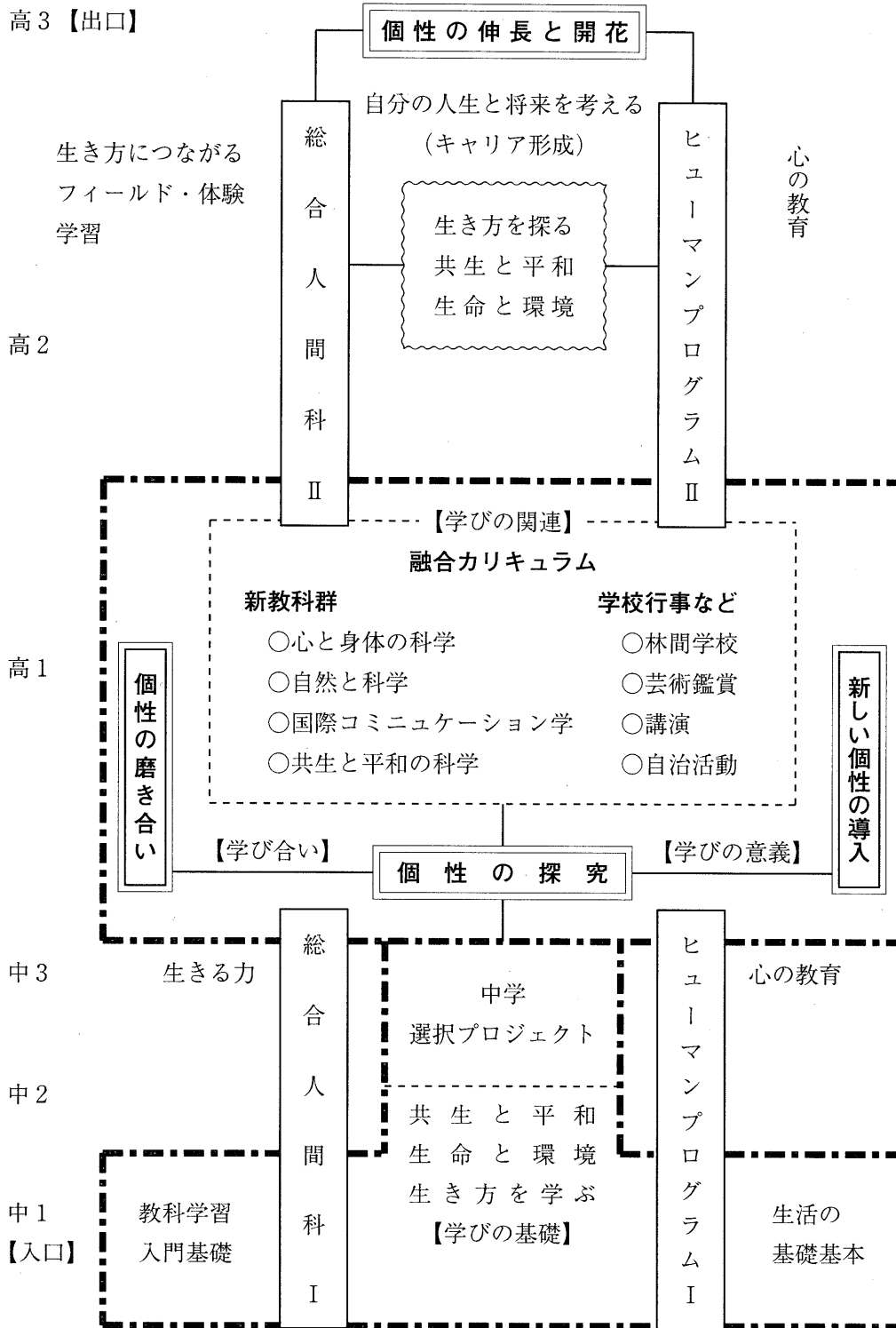
学年	区分	個・学び・生活の面から	生きる力(生き方、心、身体)から
		教科、学習方法、能力自治など	人間関係、コミュニケーション、人生選択
中学 1 年生	入 門 基 礎 期	<ul style="list-style-type: none"> ◎個を知る 集団と個 ○学力の基礎、生活の基盤づくり 時間をかけじっくり学ぶ 学び方の基礎、生活の基礎 ○集団の自治・自律の基礎 	<ul style="list-style-type: none"> ○心と身体をみつめる 人間関係の基礎基本 ○[生き方を探る] 身近な出会いのフィールドワーク
中学 2 ・ 3 年	個 性 探 求 期	<ul style="list-style-type: none"> ◎個を探す ○自立と協同の学び 系統学習と参加型学習 動機づけとしての選択学習 ○自治能力の育成 集団の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ○心と身体の変化を知る 人間関係の充実 共生、異質な他者 ○[生き方に学ぶ] フィールドワークの拡大 インターンシップ
高校 1 ・ 2 年	専 門 基 礎 期	<ul style="list-style-type: none"> ◎個性を磨き合い、個を伸ばす ○自立的学習・生活の形成 専門的な学びの意義と選択学習 人生を選択する力の育成 ○自治能力の発展 社会への参与 	<ul style="list-style-type: none"> ○心と身体を学問的に学ぶ 心の痛み、共感 コミュニケーション能力の社会化 ○[生き方を総合する] フィールドワークの深化 インターンシップ
高校 3 年 生	個 性 伸 長 期	<ul style="list-style-type: none"> ◎個の確立・発展と社会的自立 社会・人生への展望 ○自学、自習へ 自らのカリキュラム編成 ○総合的行動力と実践力 社会への発言 	<ul style="list-style-type: none"> ○心と身体の見つめ直し、 自分の人生と将来を考える 自分を客観的にとらえる ○[生き方を選択する] 生き方とつなぐフィールドワーク

(5) 中高一貫教育のカリキュラム展開について
 (「総合人間科」「心と身体のソーシャルスキル」「融

合カリキュラム」)

3要素を図式化したものが次に示す構造図である。

個性的自立にむけての併設型教育課程の構造



※ヒューマンプログラムは「ソーシャルライフ」として展開予定

(6) 併設型中高一貫カリキュラムの具体的展開計画

①総合人間科を柱にキャリア形成を視野に入れた新しいカリキュラム構造

中学では平成14年、高校では同15年から導入される総合的な学習のことである。

本校は平成7年度より文部省の研究開発として中高における総合学習のカリキュラム開発研究に取り組んできた。これが「総合人間科」である。併設型中高一貫では従来の開発研究段階から実質的な中核カリキュラムとして充実・発展させる。同時に6年に渡り自らの将来像を模索し、他教科とのつながりを深めていく中高一貫教育の中核的な存在となる。

②人間関係の学び直しとしてのソーシャルスキルプログラム構想 (ソーシャルライフ)

ソーシャルスキルプログラムとは、自己発見、人間関係、ソーシャルスキル、コンピテンスなどの習得を中高6カ年の中にプログラム化し自覚化させるカリキュラムである。教育学部と共同開発することで研究と実践の統一を図る。

中高一貫教育導入のねらいに、ゆとりの中で取り組む心の教育がある。本校はソーシャルスキルプログラム (ソーシャルライフ) を「心と体」まで広げて、カリキュラムのもう一つの柱とする。自己発見は自分の心と体の理解が基礎となる。

③高校融合カリキュラム、中学選択プロジェクト構想

融合カリキュラムとは現在の中等教育に必要なかつ、21世紀に向けての新たな教科を視野に入れた既存教科の統合再編の新教科の試みである。これらはまた総合学習と既存教科を発展させた位置づけとなっている。次の4分野を軸に超教科として全教科からのアプローチを考えていく。

- ・心と身体の科学
- ・自然と科学
- ・国際コミュニケーション学
- ・共生と平和の科学

このカリキュラム展開は併設中出身生徒と新たに高校から入学する生徒の融合も目指している。つまり併設型における高校1年生の位置づけ、新しい個性の導入による個性の磨き合い、併設中学出身生徒との交流学习、高校での総合学習への基礎づくりの学習を重視する。また教科の発展的学習として外部講師の積極的な導入も考えられる。

中学選択プロジェクトとは必修教科及び選択教科とのクロスカリキュラム (合科を含む) として、中学でも導入学習として展開する。

中学での具体的展開

- 新教科ではなく「選択教科」のクロスカリキュラムとして展開する。
- 中2と中3の学年を超えた異年齢学習集団を編成する。
- テーマのクロスカリキュラムから統合単元とティームティーチングの導入。

高校での展開

- 教科再編の新教科として展開する。
- 高1、高2の異年齢の選択教科とする。
- 外部中出身者 (高校では40名) に対する中高一貫教育の補完並びに学びの交流の場とする。
- 総合人間科と既存教科をつなぐものである。